

『Yahoo! 知恵袋』に見る夫婦間葛藤解決方略

川 島 亜紀子

日本学術振興会特別研究員 (PD)

Marital conflict resolutions expressed in “Yahoo! Answers”

KAWASHIMA, Akiko

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (Chiba University)

夫婦間葛藤に関する心理学的研究は、我が国においては比較的新しい領域であり、多くの研究は欧米における研究で使用される尺度を使用するか、あるいは、それらを基に、日本版を作成することが多かった。そのため、我が国独自の葛藤のあり方について測定しきれていないのではないかと懸念があった。そこで、本研究では、我が国における夫婦間葛藤解決方略の実態について検討するため、インターネット上のサービスである、“Yahoo! 知恵袋”に寄せられた情報を使用し、我が国の夫婦間葛藤の実態や、葛藤解決方略の実態について検討することを目的とした。その結果、大きな枠組みとしては、欧米での先行研究との違いは見いだされなかったが、攻撃性の表出方法や、譲歩のあり方において違いがみられる可能性が示された。今後、これらの結果を基に尺度を構成し、本結果が我が国の実態を反映しているのかどうかを検討することが求められる。

キーワード：夫婦間葛藤 (marital conflict) 解決方略 (conflict tactics) 夫婦 (marital relationship) 子ども (child)

問題と目的

欧米を中心とした心理学的研究においては、夫婦間葛藤 (marital conflict) と、夫婦や子どものメンタルヘルスとの関連が、一貫して見出されている。たとえば、Fincham (2003) は、夫婦間葛藤に関する先行研究から、夫婦間葛藤と夫婦の抑うつ、摂食障害、アルコール依存等の問題との関連があることを示している。中でも、夫婦関係の質と抑うつ症状との関連は、多くの研究で実証されており、葛藤の多さが夫婦の抑うつ症状の発症に関連する、という因果関係も報告されている (Hawkins & Booth, 2005; Heene, Buysse, & Van Oost, 2005)。こうした傾向は、わが国でも検証されつつあり、良好でない夫婦関係と夫婦の抑うつとの関連が、ほぼ一貫して見出されている (小田切・菅原・北村・菅原・小泉・八木下, 2003; 詫摩・八木下・菅原・小泉・菅原・北村, 1999)。

また、夫婦関係、特に夫婦間の葛藤を伴う否定的側面と、子どものメンタルヘルスとの関係も、多くの研究によって示されている (レビューは、Cumplings, Davies, & Campbell (2000)、Davies & Cummings (1994)、Erel & Burman (1995)、Fincham (1998)、Grych & Fincham (1990)、Zimet & Jacob (2001) 参照)。これらの研究では、夫婦間葛藤は、子どもの不安・抑うつ型問題 (internalizing problems) のみならず、攻撃・行動化型問題 (externalizing problems) とも関連することが示唆されている。我が国においても、両親の夫婦間葛藤と子どものメンタルヘルスとの関連が実証されつつあるが (川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤, 2008 ;

Kawashima, Maeshiro, Sugawara, Sakai, & Ito, 2009 ; 氏家・二宮・五十嵐・井上・山本・島, 2010)、欧米に比較すると、研究の蓄積が少なく、夫婦間葛藤の定義もあいまいである。本研究では、夫婦間葛藤を“夫婦の間に何らかの心理的 (認知的・情緒的) 対立のある状態”と定義し (川島, 2008)、夫婦間葛藤の顕在的・潜在的側面について、インターネット投稿サイト、“Yahoo! 知恵袋”に寄稿されたデータを基に分析し、夫婦間葛藤の実態を測定する新たな視座を提供できるかどうかについて検討することを目的とする。

夫婦関係や夫婦間葛藤の実態の把握は難しく、欧米における夫婦関係研究でも様々な方法が使用されている。否定的コミュニケーションの観察からは、相互敵意 (mutual hostility)、要請 (敵意) -回避 (demand (hostile) -withdrawal)、積極関与 (engaging) の三種類が見出されている (Gottman & Levenson, 1992)。自己報告法では、Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman (1996) が開発した、葛藤対処行動尺度 Conflict Tactics Scale (CTS2) がある。夫婦間葛藤時の暴力に焦点が当てられているため、攻撃行動に重点が置かれており、“交渉 (情緒・認知)”、“心理的攻撃”、“物理的攻撃”、“性行為の強要”などが含まれる (Table 1)。CTS2は、夫婦間を含む親密な対人関係における攻撃行動の実態を捉えるうえで有用である (e.g. Smith Slep & O’Leary, 2005)。

さらに、観察可能ではあるが、直接的な攻撃行動としては表明されない、夫婦間での間接的な攻撃を測る夫婦間関係性攻撃尺度 (Couples Relational Aggression and Victimization Scale, CRAViS (Carroll, Nelson, Yorgason, Harper, Ashton, & Jensen, 2010)) も開発されている。CRAViSでは、夫婦関係における無視や冷たい仕打ち (Love withdrawal) と、夫婦外の関係 (友人や親

連絡先著者：川島亜紀子

Corresponding :

Table 1 葛藤対処行動分類

大分類	小分類	具体的項目
交渉 negotiation	情緒	ケンカしていても思いやりを示す、相手の感情を尊重する、きつとうまくいくと思うと伝える
	認知	自分の立場を説明する、問題についての打開策を提示する、相手の提案した打開策に賛成する
心理的攻撃 psychological aggression	軽度	暴言、ののしり、怒鳴る、大きな音を立てて出ていく、意地悪を言う
	重度	身体的な特徴について悪口を言う、相手の持ち物を壊す、パートナーとして最低と言う、殴るとか投げると言って脅す
物理的攻撃 physical assault	軽度	怪我するようなものを投げる、相手の腕や髪をねじりあげる、相手を突き飛ばしたり強くゆすったりする、強くつかむ、平手打ちする
	重度	ナイフを使う、パンチ／もので殴る、首を絞める、壁に叩きつける、ぼこぼこにする、故意にやけどさせる、蹴る
性行為の強要 sexual coercion	軽度	避妊せずに性交する、嫌がるのに強要する（物理的な力は使用しない）
	重度	力づくで強要する（叩く、押さえつける、武器を使うなど）、脅して強要する

注) CTS2 (Straus, et al., 1996) を基に作成。

Table 2 夫婦関係性攻撃下位尺度

下位尺度	具体的項目
社会的攻撃 social sabotage	うわさを流す
	個人情報流す 第三者を味方につける、など
冷たい仕打ち love withdrawal	無視する
	愛情表現を控える、など

注) CRAViS (Carroll, et al., 2010) を基に作成。

せきなど) を巻き込んで、相手の対人関係にダメージを与える (Social sabotage) の2下位尺度が用意されている (Table 2)。まだ研究の蓄積は少ないが、夫婦関係の質の予測と関連することが示唆されている (Carroll, et al., 2010)。

一方、観察可能ではない夫婦間葛藤については、Finchamを中心とした研究グループが原因帰属理論を援用して、夫婦間葛藤の認知的側面に焦点を当てている (Bradbury & Fincham, 1990)。Fincham & Bradbury (1992) は、この夫婦間葛藤の認知的側面を測定するための尺度Relationship Attribution Measure (RAM) を作成した。RAMは、夫婦関係の質の予測因子として有用であることが示されている (Fincham & Bradbury, 2003)。夫婦のいずれか、もしくは、双方が、明確な葛藤行動として表出していないが、内面に不満を抱えている場合も想定可能であり、顕在的な葛藤行動だけではなく、潜在的側面についても考慮に入れていくことは重要である。

一方、インターネット投稿サイト“Yahoo!知恵袋”は、ヤフー株式会社が2004年4月から提供しているインターネット上の質問応答サービスで、日本で最大級である (国立情報学研究所IDR, 2011)。2012年9月末現在

において、質問総数は約1,000万件、回答総数は、2億件以上に上っている (Yahoo! Japan, 2012)。閲覧数の総計は提供されていないが、さらに多くの閲覧数があるだろう。質問数や回答数、閲覧数の多さから、我が国の実態をそのまま反映すると捉えることは、早計かもしれないが、“Yahoo!知恵袋”が広く一般に浸透しており、一般人口における実態をある程度反映すると考える。本研究では、国立情報学研究所によって提供された、“Yahoo!知恵袋 (第2版)” のデータを用いて、我が国における夫婦間葛藤の実態について、特に葛藤対処に焦点を当てて検討を行う。

夫婦間葛藤の実態について捉える視点としては、先にあげた顕在的葛藤と潜在的葛藤を用いるが、さらに、詳細な分類のために、葛藤の実態として、深刻さ (頻度、強度) および、子どもを巻き込む程度についても併せて検討を行うこととする (Grych & Fincham, 1993)。先述した先行研究と比較検討することによって、我が国の夫婦の特徴を探り、夫婦間葛藤解決の実態について検討することが本研究の目的である。

方法

使用データ 国立情報学研究所がヤフー株式会社から原データの提供を受けて、2011年2月から研究者に提供を行っている“Yahoo!知恵袋データ (第2版)” データを使用した。データには、サービスが開始された2004年4月1日～2009年4月7日までのものが含まれ、質問データ総数は16,098,580件、回答データは49,673,309件であった。

使用ソフトウェア データの読み込みとデータ抽出には、EmEditor Professional (ver 11.0.5, Emursoft, Inc., 2011) を使用した。

Table 3 Yahooカテゴリによる、「夫婦げんか」「夫婦喧嘩」「夫婦ゲンカ」によって抽出された質問の分類

大カテゴリ	小カテゴリ (例)
>生き方と恋愛、人間関係の悩み (1,376)	家族 (984)、恋愛相談・人生相談 (285)、恋愛相談 (77)、友人 (12)、職場 (10)
>暮らしと生活ガイド (355)	法律相談 (140)、住宅 (74)、家事 (35)、不動産 (23)、ペット (15)、法律・消費者問題 (13)
>健康、美容とファッション (230)	メンタルヘルス (92)、ストレス (64)、病気・症状 (33)、カウンセリング (27)
>子育てと学校 (229)	子育ての悩み (125)、子育て・出産 (29)、妊娠・出産 (28)、幼児教育 (14)、小学校 (11)
>マナー、冠婚葬祭 (81)	マナー (25)、結婚 (24)、宗教 (17)
>教養と学問、サイエンス (71)	一般教養 (21)、日本語 (17)、生物・動物 (11)
>エンターテインメントと趣味 (68)	テレビ、芸能人、占い、アニメ、映画、音楽
>ニュース、政治、国際情勢 (41)	政治・社会 (18)、事件、事故
>Yahoo! JAPAN (34)	Yahoo!知恵袋 (29)、オークション
>ビジネス、経済とお金 (30)	家計 (13)、ローン、保険
>職業とキャリア (23)	退職、転職
>スポーツ、アウトドア、車 (22)	格闘技、自動車
>その他 (17)	アダルト (15)、パチンコ
>インターネット、PCと家電 (9)	テレビ、携帯電話
>地域、旅行、お出かけ (9)	国内、テーマパーク

注) () 内数値はn、ただし、n=10以上のもの

分析手順 データ量が膨大であるため、以下の手順を踏んで、分析対象を狭めた。1) 質問データを用い、「夫婦」を含むデータを検索 (131,329件)、2) 抽出されたデータから、「夫婦げんか」、「夫婦喧嘩」、「夫婦ゲンカ」を含むデータを検索、3,497件²が抽出された (Yahoo!カテゴリによる分類をTable 3に示した)。3) Grych & Fincham (1993) による葛藤の深刻さ (頻度、強度、子ども関連)、葛藤解決について抽出するため、「どれくらい (16件)」「どのくらい (27件)」「どの程度 (15件)」「どんな (182件)」「子どもの前 (83件)」「仲直り (183件)」「コツ (17件)」を含むデータを検索し、重複したデータを削除し、473件を抽出した。4) 抽出された質問データと対応する回答データを抽出した。5) さらに、個人が特定可能な質問および回答 (個人的な攻撃や助言等) については分析から除外し³、全1,122件を分析の対象とすることとした。

結 果

上記手続きによって、抽出した1,122件について、以下に示す分類方法によって、分析を行った。データ集計結果をTable 4に示す。

質問者および回答者の属性 質問者・回答者が、明確に自身の性別を明らかにしているものについて集計したところ、女性からの質問・回答が多く (372件)、男性は

その3分の1程度であった (106件)。半数以上の質問と回答には、自分の性別に関する記載はなかった。結婚年数についての記載は79件で、平均は8.9年 (中央値は5.0年、0.5-45年) であった。子ども人数についての記載は33件で平均1.3人 (0-3人)、子どもの年齢についての記載は27件で、平均4.9歳 (中央値は3.3歳、0-18歳) であった。

夫婦間葛藤の深刻さ 夫婦間葛藤の頻度についての記載があったもの (38件) については、「一度もない」から「一日に3回」までが含まれ、平均値は1か月に6.7回、中央値は0.1であった (0-90回/日)。次に、夫婦間葛藤の持続時間について記載のあった126件について、平均値を算出したところ25.5日間となったが、「1年以上」という回答を含んだためであり、中央値は2.0日間であった。

夫婦間葛藤の深刻さ (方略) について、話し合い・口げんか、暴力、関係性攻撃、離婚 (脅し、希望を含む) について、記載の有無を検討したところ、話し合い・口げんかが最も一般的である可能性が示された (80件)。記入者の男女比は、女性において多かったが (約1:8)、内容を検討すると、多くは、一方が強く批判し (女性であることが多い)、もう一方が逃避する (男性であることが多い)、という要請 (敵意) - 回避のパターンが認められた。さらに、内容からは、理路整然と相手の問

1 夫婦間葛藤と関連する日本語は多数存在するが、データ範囲を狭めることが目的であったため、ここでは、「夫婦げんか」を対象を絞ることとした。

2 数値は検索語数。

3 国立情報学研究所との契約により、個人的情報や個人的内容の公表が制限されているため。これにより、本研究で使用したローデータの公表はしない。

Table 4 Yahoo!知恵袋において表明された夫婦げんかの実態 (N=1,122)

分類カテゴリー	下位分類	記述数・記述内容
葛藤頻度	頻度 (／月)	M = 6.1、median = 0.1
葛藤強度	持続時間 (日)	M = 25.5、median = 2.0
	話し合い・口げんか	80
	暴力	63
	関係性攻撃	58
	離婚	25
葛藤内容	配偶者の個人内要因 (人格、癖、行動)	53
	子ども関連 (育児、子どもの問題など)	13
	性にまつわる問題 (婚外交渉含む)	13
	拡大家族 (両親、義両親など)	12
	金銭的問題	10
解決方略	謝罪	206 (うち夫から36、妻から23)
	妥協 (あきらめを含む)	177
	何もしない、普段通り	152
	気分転換、話題転換	101
	身体接触 (性的接触含む)	71
	プレゼント、外食など	49
	復讐	41
	子ども関連 (子ども “かすがい”)	23
子どもへの曝露	子どもへの配慮	82
	子ども情動問題	45
	子ども行動上問題	22
	子ども巻き込み	22

注) 重複あり。

題を指摘し、退路を断つことが、夫婦関係にとって否定的な影響を及ぼすと示唆する回答が散見された。話し合いの中には、脅しや怒鳴りつける、などの言語的な攻撃 (CTS2における心理的攻撃) に含まれるような内容も含まれ、特に女性が受けた場合に恐怖を体験することが示された。

また、暴力や関係性攻撃についてもみられた (順に63件、58件)。暴力についての記載は、女性において多かったが (約1:6)、女性が被害者である場合も加害者である場合も含まれた。ただし、内容からは、女性が被害者である場合 (男性が加害者である場合)、けがの程度がひどいことも示された。また、女性が加害者である場合には、凶器 (多くの場合、包丁など家事に使用するもの) が使用されることも見受けられ、CTS2に含まれる物理的攻撃が、我が国においても見られることが示された。

関係性攻撃も女性による記述が多く (約1:5)、多くは無視であった (CRAViSにおける“冷たい仕打ち”に相当)。葛藤の持続時間は、無視の期間とほぼ一致しており (一部は、家出が含まれる)、同じ家庭にいな

ら、長期にわたって無視し続ける夫婦も存在することが示された (多くの記載は、無視される、という被害者の立場であった)。長期にわたる無視は、否定的結果につながる事が、多くの回答によって示されていたが、短期間の無視は、パートナーへの怒りのコントロールのために有用であることも示唆されていた。無視以外の関係性攻撃としては、パートナーの両親を巻き込む、子どもを巻き込む、などが含まれた。

離婚については、二つの側面が含まれ、離婚を脅しに使う場合 (心理的攻撃) と、子育て終了後に離婚届を提出する願望 (復讐、あるいは関係性攻撃) の場合が挙げられた。離婚についての記載の、男女比は、ほぼ同じであった (約1:3)。

夫婦間葛藤の原因・内容 葛藤の原因でもっとも多かったのは、パートナー要因であった。パートナーについての記載の男女比は、全体の男女比と同程度であった (約1:3)。パートナーの性格や人格に関する記載はほとんどなかったが、サポートのなさ (情緒的・道具的) や、約束の不履行、マナーなどが挙げられていた。子ども関連の原因については、おおむね、子育てサポートの欠

如、育児方針の相違などであった（男女比は約1：3）。性的な側面についても、金銭面についても、男女の比率がほぼ同じで（約1：1）、若干男性の記述割合が高いことが示唆される。性的な側面については、婚外交渉や性交渉の拒否、性行為の強要なども含まれた。金銭面に関しては、将来についての心配に基づくものが含まれた。親戚関連の問題は、記者はほぼ女性であった。親戚関連の問題では、パートナーによるサポートのなさが問題とされることが多かった。

夫婦間葛藤の解決・予防 もっとも解決方略として多かったのは謝罪であった。記載の男女比は、全体の男女比とほぼ同程度であったが（約1：3）、記者の男女に関わらず、“常に夫が謝る”という回答は、“常に妻が謝る”という回答よりも多かった。“悪いほうが謝る”という記載も多かったが、“先に謝ったほうが男らしい”という記載も見られた。また、謝罪行為は、関係の修復を目的としているものもあれば、ただその場をやり過ごすために行われることも示された。譲歩・妥協に関しては、女性による記載のほうが多かった（約1：4）。謝罪同様、関係修復のために行うような、解決策の提案から、話し合いの終結のみを目的とするものもあった。これらの意図によって、結果が異なる可能性も記載されており、その場しのぎの謝罪や譲歩・妥協は、同じ葛藤を繰り返すことにつながるが、関係修復のための謝罪や譲歩は、葛藤後の親密度を高めることが示唆された。

「普段通り」、「何もしない」、は、女性において多く（約5倍）、諦めに近い状態も含まれたが、事を荒立てずに、時間が経つのを待ちながら、家族が心地よく生活できるよう努力しているという記載も含まれた。特に、「普段通りのあいさつ（おはよう、いってらっしゃい、おかえりなさい）」の効用についての記載が見られた。

気分転換、話題転換については、全体の比率と比較すると、若干男性の割合が高かった（約1：2）。葛藤を回避する行動ではあるが、ユーモアを使用するなどした場合には、効果的であることが示唆された。また、葛藤状態に陥る前に、話題を変えたり、気を紛らわせたりして、深刻な葛藤を避ける行為も見られた。

プレゼントによる解決、身体接触、復讐、子ども関連の解決についても、男女比の違いはなかった（約1：3）。プレゼントの多くは食べ物であることが示され、後に残らないことが望ましいという回答が見られた。身体接触についての記載の一部は解決というよりは、性行為の強要につながるものも含まれた。復讐は、その場でやり過ぎした後、相手が不在の状況で攻撃を行うもので、心理的な攻撃でも身体的な攻撃でもありうる。男性では、被害者として、女性では、加害者としての立場が多かった。子ども関連の解決については、子どもが直接葛藤に介入することもあれば、日々の生活の中で子どもがいることで、否定的感情から解放されるという記述も見られた。

子ども関連 夫婦間葛藤が、子どもに影響を及ぼすのではないかと心配する記載は、全体で82件であり、今回抽出したデータの1%未満であった。子どもに配慮して、子どもの前での葛藤はしない、という記載と子どもに解決を見せることが望ましい、という記載の両方が見られた。男女比は女性のほうが多く、約4倍であった。深刻

な夫婦間葛藤に曝露された子どもの問題についても記述があり、情緒的問題や行動上の問題などの指摘があった。この中には、少なからず、子どものころに両親の夫婦間葛藤を見て傷ついた体験を踏まえている記載が見られた。

考 察

欧米の尺度との比較 本分析結果から、CTS2やCRAViSに含まれるすべての行動が、見出された。したがって、夫婦間葛藤はある程度、文化間で共通である可能性が示された。一方で、本分析によって、これまで欧米ではあまり取り上げられなかったような行動も見られた。たとえば、川島（2008）が使用した回避行動（表面上合わせる行動（我慢する、聞き流す（受け流す）、何事もなかったように振る舞うなど）がその例である。さらに、気分転換や話題転換といった行動も見受けられ、ユーモアを使用した回避行動が、適応的な結果につながる可能性も示された。

また、あいさつをする、日常生活をきちんと送る、といったような行動の重要性も示された。逆に、これらをしていないことによって（無視もしくはネグレクト）、パートナーをコントロールしようという方略も見られた。特に、女性が夫のための家事を放棄することは、強い影響力を持つとの記載が散見され、男女平等化が進むことによって、葛藤対処方略に変化が見られる可能性もある。このような家事のサボタージュは、相手に気づかれる形での復讐であるが、相手に気づかれない形で復讐するという、新たな対処方略（葛藤対処というよりは、葛藤によるストレスへの対処方略と考えられる）も見られた。こうした側面が、その後の夫婦関係とどのように関連するのか、検討することも有用であろう。

子どもとの関連 CTS2やCRAViSは、子どもに対する視点が不足している。一方で、夫婦間葛藤と子どものメンタルヘルスとの関連において使用されるPorter O'Leary Scaleや、Children's Perception of Interpersonal Conflictといった尺度には、夫婦間葛藤の実態があまり反映されているとは言えない。とくに、子どもを抑止力として使用（利用）するという行為が見られたことから、子どもは夫婦間葛藤における切り札として利用される可能性がある。川島（2008）では、子どもへの態度として、いないところで話し合う、説明する、相談する、が含まれたが、子どもをかすがいとする行動、子どもを盾にする行動、子どもを巻き込む行動なども含める必要がある。

夫婦間葛藤の意味と意義 本分析中で、“ケンカするほど仲がいい”という記述と、“ちりも積もれば山となる”という記述の両方が見受けられた。このことから、夫婦間葛藤と夫婦の親密さは別の次元としてとらえるべきであることが示唆される。そして、子どもへの影響を考える場合には、夫婦の親密さは、調整変数としての役割を取るのではないだろうか。つまり、夫婦が親密であれば、多少葛藤が深刻でも、子どもへの影響は少ないだろうが、夫婦が親密でなく、葛藤も深刻である場合には、たった一度の口論であっても、子どもへの影響は甚大であろう。夫婦間においても、夫婦の親密さは、問題の認

知、夫婦間葛藤に対する意味づけ、葛藤方略の選択、目標の選択と大きく関わると考えられる。本分析の中から、親密さの規定要因の一つは、パートナーへの期待と実態との折り合いである可能性が示された。この折り合いに関連する要因には、パーソナリティとしての固執性の高さや、期待の高さ、夫婦関係における頻繁な挫折体験の繰り返しなどがありそうである。今後、夫婦関係の発達の变化について検討するうえで、親密さの規定要因を検討していくことは、夫婦間葛藤の意味を理解していくうえでも重要であろう。

今後の課題 本分析で得られた結果は、“Yahoo!知恵袋”という、インターネット上のコミュニティから得られた情報を基にしている。本研究では、明らかに内容が同じでなければ、別の人間のものであると判断しているが、同じ人がいくつもコメントしている可能性もあり、データの偏りは否めない。したがって、今後、本研究で得られた結果を基に、尺度を構成し、夫婦間葛藤の実態と適応上の意味について検討していくことが求められる。さらに、本研究の結果が我が国独自の傾向かどうかを明らかにするためには、これを基に作成された尺度を使用した比較文化研究が不可欠である。こうした研究を通じて、より良い家族内コミュニケーションを検討し、健やかな発達を支えるための提言を行っていきたい。

謝 辞

本研究で分析に使用されたデータは、国立情報研究所NIIによって提供されたものです。貴重な資料の使用をご許可いただきありがとうございます。本論文の作成に当たり、指導ご助言をくださいました、千葉大学 中澤潤先生、東洋大学 榎本淳子先生、日本女子体育大学 中道直子先生、静岡大学 中道圭人先生、ならびに中澤研究室に所属する皆様に、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Bradbury, T.N., & Fincham, F.D. (1990). Attributions in marriage: Review and critique. *Psychological Bulletin*, **107**, 3-33.
- Carroll, J.S., Nelson, D.A., Yorgason, J.B., Harper, J.M., Ashton, R.H., & Jensen, A.C. (2010). Relational aggression in marriage. *Aggressive Behavior*, **36**, 315-329.
- Cummings, E.M., Davies, P.T., & Campbell, S.B. (2000). *Developmental psychopathology and family process: Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press.
- Davies, P.T., & Cummings, E.M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, **116**, 387-411.
- Erel, O., & Burman, B. (1995). Interrelatedness of marital relations and parent-child relations: A metaanalytic review. *Psychological Bulletin*, **118**, 108-132.
- Fincham, F.D. (1998). Child development and marital relations. *Child Development*, **69**, 543-574.
- Fincham, F.D. (2003). Marital conflict: Correlates, structure, and context. *Current Directions in Psychological Science*, **12**, 23-27.
- Fincham, F.D., & Bradbury, T.N. (1992). Assessing attributions in marriage: The Relationship Attribution Measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 457-468.
- Fincham, F.D., & Bradbury, T.N. (2003). Marital satisfaction, depression, and attributions: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 442-452.
- Gottman, J.M. & Levenson, R.W. (1992). Marital processes predictive of later dissolution: Behavior, physiology, and health. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 221-233.
- Grych, J.H., & Fincham, F.D. (1990). Marital conflict and children's adjustment: A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, **108**, 267-290.
- Grych, J.H., & Fincham, F.D. (1993). Children's appraisals of marital conflict: Initial investigations of the cognitive-contextual framework. *Child Development*, **64**, 215-230.
- Hawkins, D.N., & Booth, A. (2005). Unhappily ever after: Effects of long-term, low-quality marriages on well-being. *Social Forces*, **84**, 451-471.
- Heene, E.L., Buysse, A., & Van Oost, P. (2005). Indirect pathways between depressive symptoms and marital distress: The role of conflict communication, attributions, and attachment style. *Family Process*, **43**, 413-440.
- 川島亜紀子 (2008). 子育て期の夫婦間葛藤の実態と子どもの精神的健康との関連。お茶の水女子大学：学位論文 (未公刊)。
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤敦子。 (2008)。両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連。教育心理学研究, **56**, 353-363.
- Kawashima, A., Maeshiro, K., Sugawara, M., Sakai, A., & Ito, K. (2009). Exploring the mediators between interparental conflicts and adolescents' mental health problems. *Proceedings: Science of Human Development for Restructuring the "Gap Widening Society"*, **5**, 91-102.
- 国立情報学研究所 IDR (2011年2月1日)。「Yahoo!知恵袋データ (第2版) の提供について。参照日2012年9月28日。参照先国立情報学研究所情報学研究データリポジトリ http://www.hii.ac.jp/cscenter/idr/yahoo/chiebkr2/y_chiebukuro.html
- 小田切紀子・菅原ますみ・北村俊則・菅原健介・小泉智恵・八木下暁子。 (2003)。夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連：縦断研究の結果から。性格心理学研究, **11**, 61-69.
- Smith Slep, A.M., & O'Leary, S.G. (2005). Parent and partner violence in families with young children:

- Rates, patterns, and connections. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **73**, 435-444.
- Straus, M.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The revised Conflict Tactics Scales (CTS2): Development and preliminary psychometric data. *Journal of Family Issues*, **177**, 283-316.
- 詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介・小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則. (1999). 夫・妻の抑うつ状態に影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について. *性格心理学研究*, **7**, 100-101.
- 氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光・山本ちか・島義弘. (2010). 夫婦関係が中学生の抑うつ症状におよぼす影響：親行動媒介モデルと子どもの知覚媒介モデルの検討. *発達心理学研究*, **21**, 58-70.
- Yahoo! Japan. (2012年9月28日). 参照日：2012年9月28日, 参照先：Yahoo!知恵袋：<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>
- Zimet, D.M., & Jacob, T. (2001). Influences of marital conflict on child adjustment: Review of theory and research. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **4**, 319-335.